

秩父名所誌

L294
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



6704



まをり 元わち路の出地あり 白物社の社より 小島

より 石路より なる前より 廿二文余り

なるき 峯より なる川中より なるなる なるなる

ら 中より なるなる なるなる なるなる

なるなる なるなる なるなる なるなる

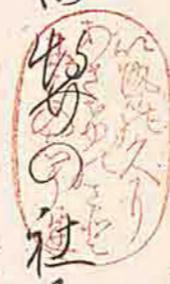
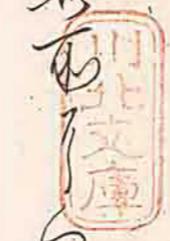
丸本 なるなる なるなる なるなる

世川 なるなる なるなる なるなる

橋より なるなる なるなる なるなる

なるなる なるなる なるなる なるなる

なるなる なるなる なるなる なるなる



吾野出白鬘之社



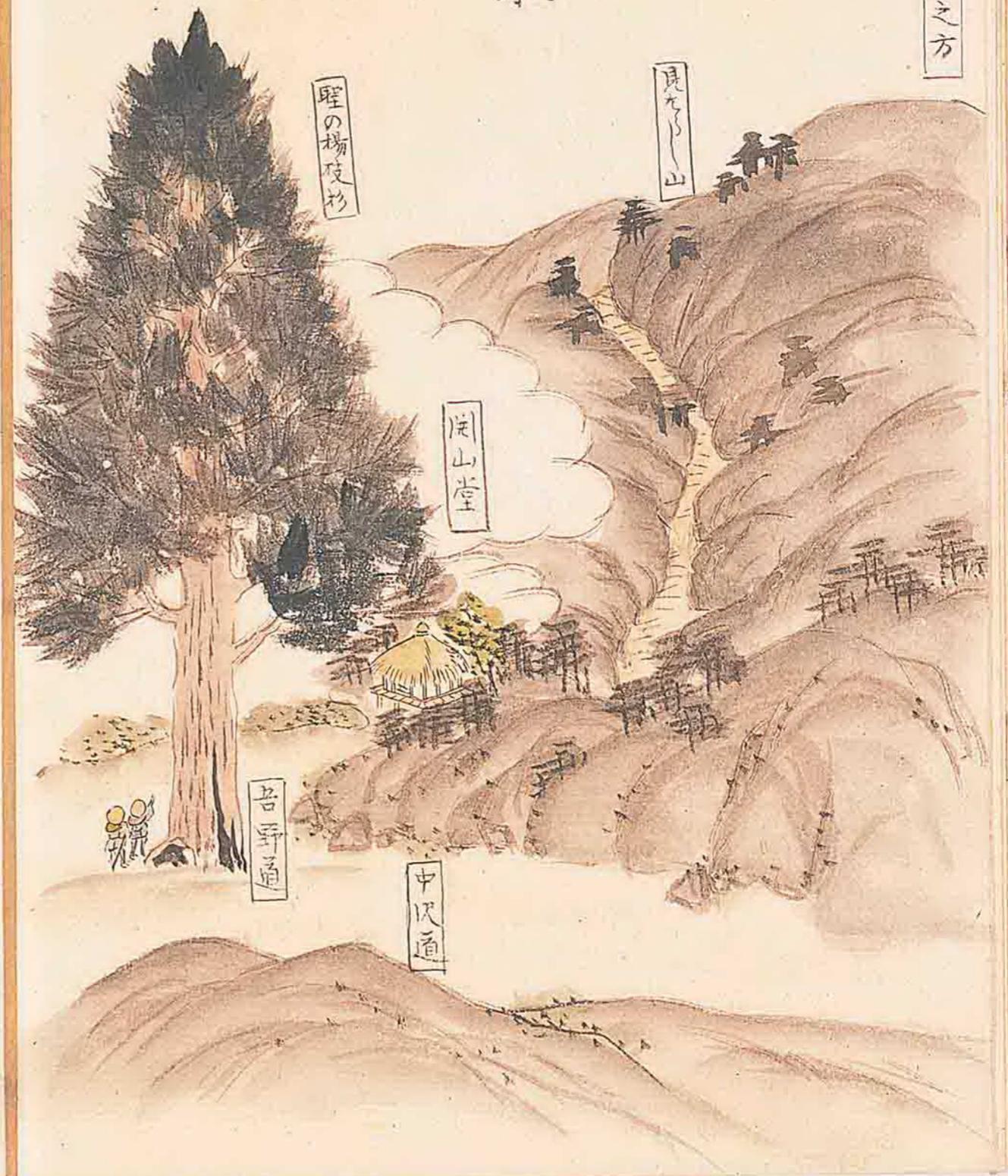
忠隆庵入口

高麗川

子権現頂上入口之園

東

江戸之方



聖の場
夜杉

長崎山

洞山堂

吾野道

中沢道

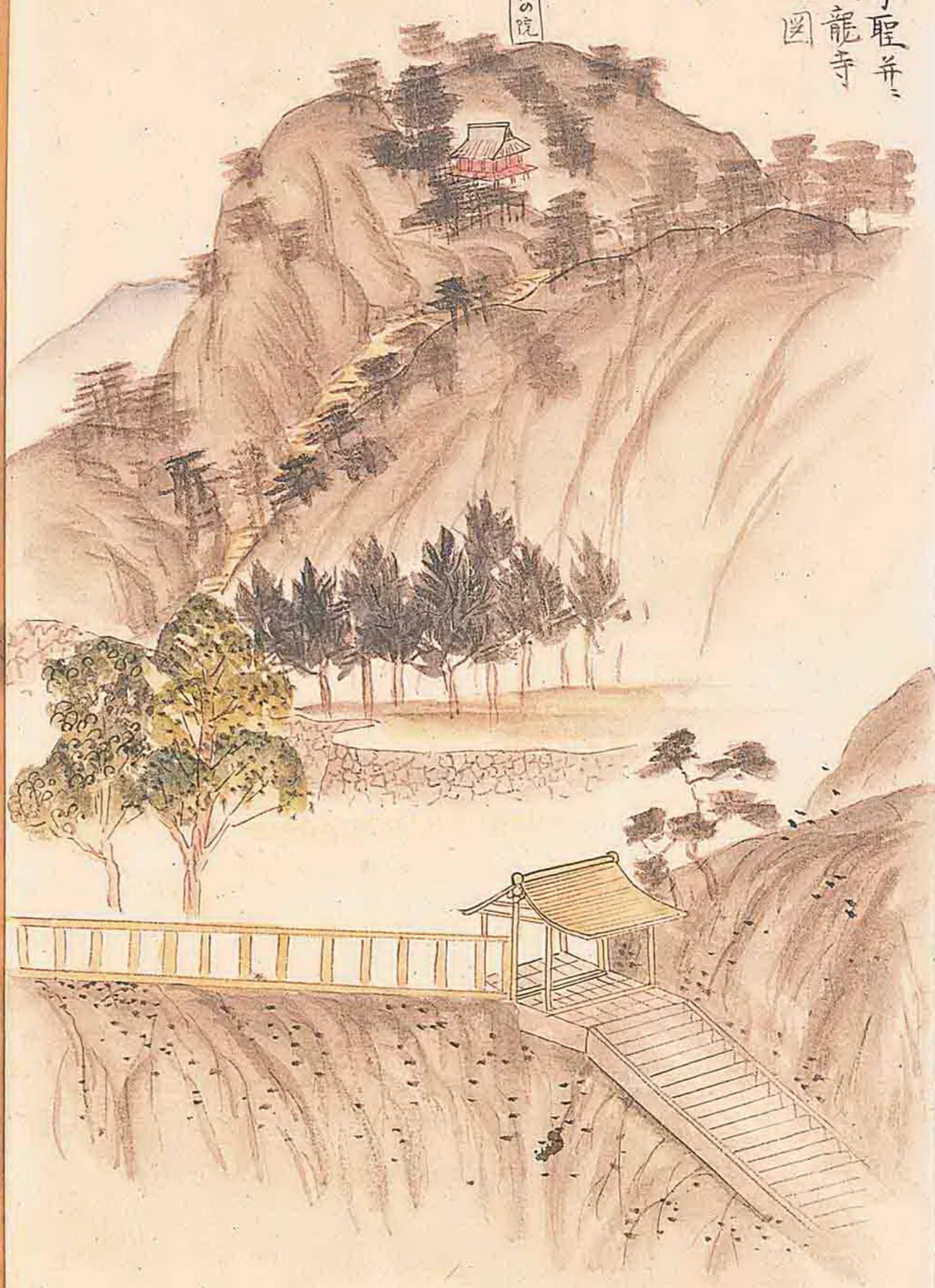


茶屋

禁葷酒

子聖并
天龍寺
之園

奥の院

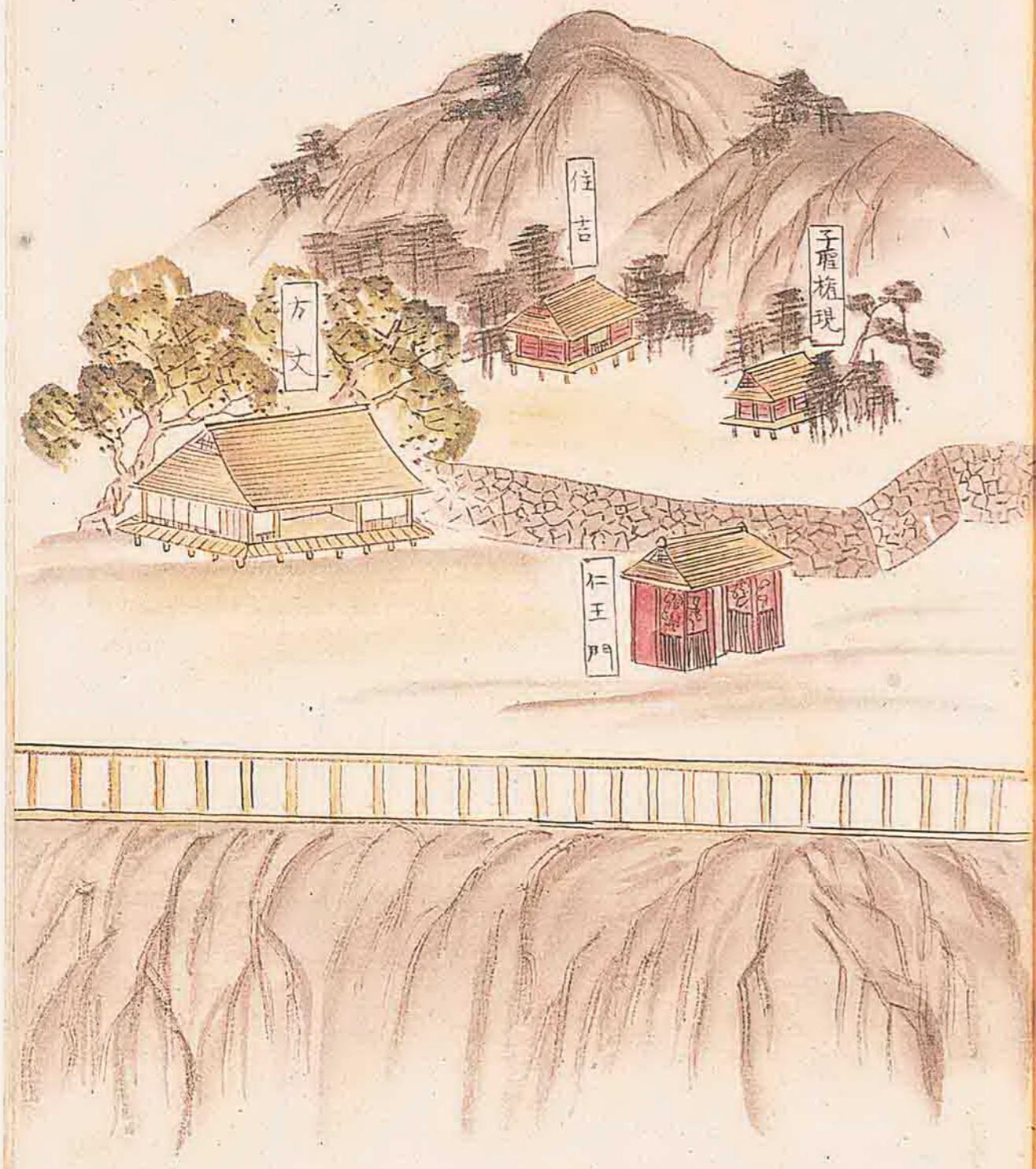


子聖栴現

住吉

方丈

仁王門



ままびあきふりよしくこの節をたすけはせ
く地のもも信りたててはこひのまもる
けしと足ゆり常きう日は既まうかきり
御んすえ束り一具そのの隅る百路とな
まらぬ一合すもあふたたくはきり物と
是遊一宿とれむしすすいえらういひうす
とさるる種一もあを拾り茅の窟とわら
しうりても致通んとかろくハ峠のきう
祖母少り位ゆれハ宿せ拾りともあ
よいとても叶うつと云志ひく立出長と
祖母少り位ゆれハ宿せ拾りともあ
よいとても叶うつと云志ひく立出長と

町と来ぬんとあはれいとさうやうあ
んまよ老人ま帰らうにやうて飛う
るう棟太火にわうるを拾うらけ
とらう一校さうとらうまて竹の
らとさうひひもいひもさう
御るもハ一宿とれむしすすい
とあう言ぬ種一もあを拾り茅の窟
拾あ魚一床とカ下ゆらうさ
窟とさう甲よハあう言ぬ人さ
すらうハまうり程は入と甲
窟とさう甲よハあう言ぬ人さ
すらうハまうり程は入と甲

婦を是れ飛脚と業としてたゞはせしむるは
一回一思にふりては、何れすし、是れをかくかく
ゆて彼とては、何れく人の治らんとす、是れをかく
こゝして、何れす、たゞぬ山の鳥より、心ありぬ、
阿きさう、はけの、志さふ、約を、と、あひ、定めて、彼
も、うら、白ひ、ま、言の、後、ま、付て、約、と、こ、こ、こ、後、と
先、不、立、て、ま、う、ゆ、急、彼、も、と、う、坂、を、疾、も、阿、も、ま、只、天
ま、こ、う、ゆ、り、く、ま、り、ゆ、り、ま、り、す、う、ゆ、は、阿、も、み、て、後、ひ
ゆ、り、も、う、く、急、後、の、寸、是、骨、れ、く、ま、を、杖、と、こ、う、
休、じ、あ、こ、う、志、て、登、る、う、ゆ、り、後、も、骨、れ、て、怨、も、彼、も、ひ

す、て、休、び、る、あ、の、ゆ、れ、と、ゆ、り、く、新、も、こ、こ、す、程、さ、
後、あ、心、る、ま、れ、と、休、も、骨、多、く、あ、ぬ、世、飛、脚、と、な、り、
た、ま、可、より、は、骨、へ、踏、進、む、所、阿、ゆ、の、宰、候、す、こ、一、語、の、骨、ゆ
阿、き、と、直、り、ま、骨、折、よ、ま、り、て、は、め、結、ぶ、結、ま、り、骨、
折、阿、き、と、ゆ、り、く、ま、り、と、ま、り、と、物、結、ま、り、骨、折、ゆ、り、
う、ま、り、と、ひ、こ、り、の、行、く、程、も、う、心、ゆ、り、九、曲、の、坂、ゆ、り、
婦、を、登、り、つ、ま、り、世、に、僕、は、平、化、ま、り、兼、座、一、新、も、骨、に
骨、折、も、ま、り、と、骨、に、直、り、は、骨、折、も、ま、り、骨、折、ま、り、
ま、り、ゆ、り、く、ゆ、り、く、ゆ、り、く、ゆ、り、く、ゆ、り、く、ゆ、り、
小、骨、の、骨、折、ま、り、ゆ、り、の、ゆ、り、と、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、

子の権現よりいさむく前のさき廣く杉並あり東の御
方眼より有り眺望おくさまよりす己れあり東家
西より新橋の上より綾文の山船夕見さうしと
初めて世より江戸とてさうしと 嶺節す世木船あり
の御東方口の出うき色あるさまを御之世家流るさま
しうねいんま一右代んごん中内今既う言を
是も言をされ今言宿信給より一やと云まじ
色世利程より候まをそとと言下の村はあ今言
行きいさむくけひりう一やせぬひて志うりて
と御方より末の家と後七と云言を御新見給より

せと先中一と一被あま止の舟中あつまうり
先は志屋つとや志のまは者せぬと子是非あり山と
わらやうよりあ一と一を甲のみらるきハ御
ハ貴者よりぬ向ひのまが膝の志を人言を来り
うけてた冬にさうまてい向ひのまもた一節
あ御書ひたうあやむおとこ色けつと云志れ
東つまハ書りといて日のさる人とする
家より一者せんは彼是たのこさとらあけす
是非あり味と誠ハ信り心せるをけりとい
そらあぬ是うとあや彼まの宿たのこらあ

藤七毒屋のりとのあるより一とせハ彼所ヤとてあや
ふくこれハ所詮若う處上と多く一と約ハ民衆のり
ホのあるよりれと珍るれとさりハお目ハささう者
同マてきらり一とれと絶て約先より細るて奴路
例ハ家のりハはあ是おや同やあんくしとさありあ
ハ今かう一と云またうのさるるれと約ハ小溝るて丸
目しとせう清んハか一とさうたうのすハ山とて梅るり
く方とておの喜すもハああると約ハたあ一とと
海踏遠一とと一とせも能るきあ一ととあ一ととと
るめと一とと一と一と約のあハ今同さるれとさう
治

何きのれと約一とと一と同ハ者ハ方よつとて一とのれと
目す一とと一と板挑灯とれ中一ととと一とと一と
あ七のあ一とと一と一と一と一と一と一と一と一と
と云よるの書出く世裡ハ田舎る多るさける者
らせめあるるそと一と一と一と一と一と一と一と一と
吾じ能るきと世のり志一と一と一と一と一と一と一と
一和れ一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
極のえにようてせ心あらはらうと一と一と一と一と
るの女の事と婦一と一と一と一と一と一と一と一と
家の版と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

秩父峠之圖

峠本屋

江戸の方



女房を人として互のつる互の細細く出く骨あり
らんは僅少人として三百又此珠幾幾のわくく
立働くるまはあつにまひも宜くまひやれり
つきと流るる是はあま人あすあるまはるに別て
初のものも似すあつにす扱はせのあまこ粉多
乾芋堀り田をあつ細く細く耕て麦前かこ
ふあつ糸川織る杯を集メてあつ世物くは
ふハ二万までそこにあつり扱て菜ハ芋大根葱は度
の乃中ナつるあつ一日も芋倉さつりあつりあつり
又中倉するあつるあつて焼飯のあつて扱あつりあ

相くあつるあつの後をく山乃あつりあつりあつて
りあつりあつるあつりあつりあつるあつりあつり
能も植物の生るるあつるあつるあつるあつるあつる
菌不自申るあつて扱て丹織るあつて扱て田畑に
入多し粉多し造るあつて扱てあつてあつてあつて
あつてあつてあつて扱

氏種造は白芋ヶ富村或光の店とて種取村は
扱て細斗りの山甲に扱て扱て扱て扱て扱て扱て
社古御ヶ前寺も曹洞宗古田町清泉寺末竟源
寺同宗横瀬村法長寺末

春日と氣者と出かしく約ハ川の場は約世川末を荒川は
流合はけりう水中に巨る多く物くの形とるせう
えらう山川をきいひいひうし流さあ一多の波はら
しう白浪うらてめう約またふへさうし
横瀬村とま甲ま細山同れ細なるてをく極る
るといふに言の山本の葉さあしよ色し
新色たるんやうと目とよるさうしひあ一村のあり
らめりハ取て入るますく流一形も包所葉
世掃を多し世掃りしうえひら横生航とありて黄
印杖又のつし一掃とそ名産とすす世度の縁約村

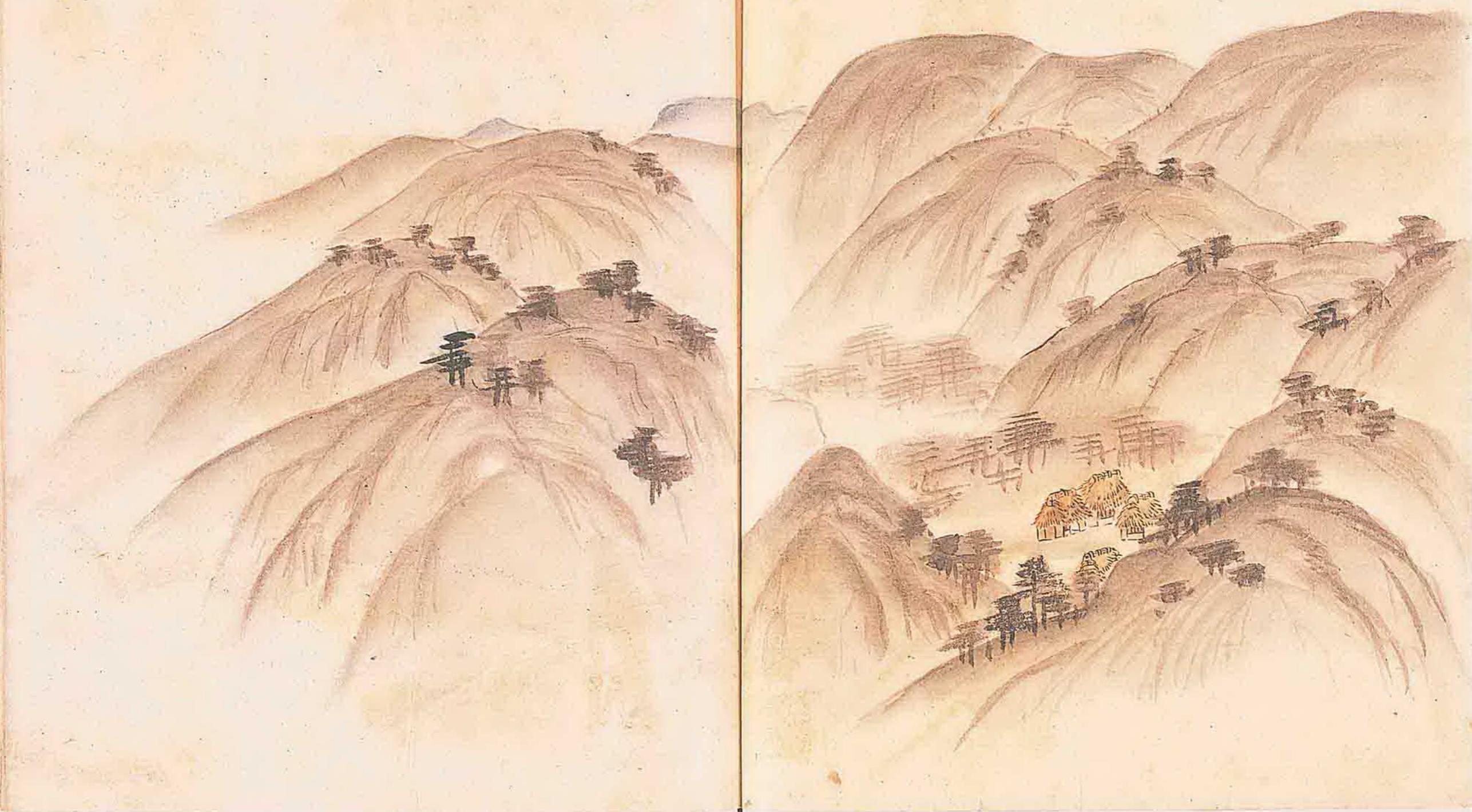
構船世之におも多うととあひ集一に村ハ今ひす
一世阿しうも世流村のいハう実のうて外ハあ
えし草も能もをまそ抱とる一あらのわが
皆さうひ約しとあし細さ谷合とりよ武甲山約茶
い同をくても但し山の斤例を全神え寸漸うて
山後と出らるまこまハ横瀬の民家ありらあ家出
くよう世あまておた山しせやうてこのうる所は細人
家さしう世村しあうて依し扇とむうけたん極
おさうあ山しとらた漏りちも砂利多く水田多
武甲山前とる

武彦造、曰横瀬村武光彦之水田畑等、亦山甲の平
地之産、川村中と流る、神社を龍王権現、龍神社
と通、竜王社、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
り、或る藤川、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
通、武甲山、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
龍神社、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
り、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
上代を祖、又と稱する、中武甲山、亦武甲山を、亦武

甲山と云、神を古く言ふ、今も妻帯、唯一なる、武彦
を、自承之、曰、龍神、亦武甲山、亦武甲山を、亦武

武彦造、曰横瀬村武光彦之水田畑等、亦山甲の平
地之産、川村中と流る、神社を龍王権現、龍神社
と通、竜王社、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
り、或る藤川、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
通、武甲山、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
龍神社、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
上代を祖、又と稱する、中武甲山、亦武甲山を、亦武
甲山と云、神を古く言ふ、今も妻帯、唯一なる、武彦
を、自承之、曰、龍神、亦武甲山、亦武甲山を、亦武
武彦造、曰横瀬村武光彦之水田畑等、亦山甲の平
地之産、川村中と流る、神社を龍王権現、龍神社
と通、竜王社、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
り、或る藤川、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
通、武甲山、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
龍神社、亦武甲山より、亦武甲山を、亦武
上代を祖、又と稱する、中武甲山、亦武甲山を、亦武

蘆ヶ窪の村之圖



父の嶽は河す武光山はサ
甲山よは義を能
此之社中流を例に種と
古人光山一といは種とつ
るこそ能に武別種又
那種瀬白種又山合を
主ととる
け合はらさるめて他
始志るる一今古は
始る一貞
享年乃のりるもとも
知れ

武義事より武光山は武光山の
持たるる人として
つとる一持ふは武別種
がとつとるる一
持ふは武別種は信がハ
前又鬼の著せり
名山
圓信ふ武光山と記した
きハ世もつとるる
とて
持ふは武別種の持と
物持らむ時武義の
け

河すは河す武光山はサ
甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り

北村武甲山の持麻
アてつとるる
十何種よてめは事と
もぬ山の時と大
美河のちとつとる
ると云は
河す
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り
田而
河山杯のや
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り
らん
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り
乃
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り
村
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り

河す
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り
武甲山よは義を能
事とて已まもとも
さるるのこれ信り

武甲山



八番丸所

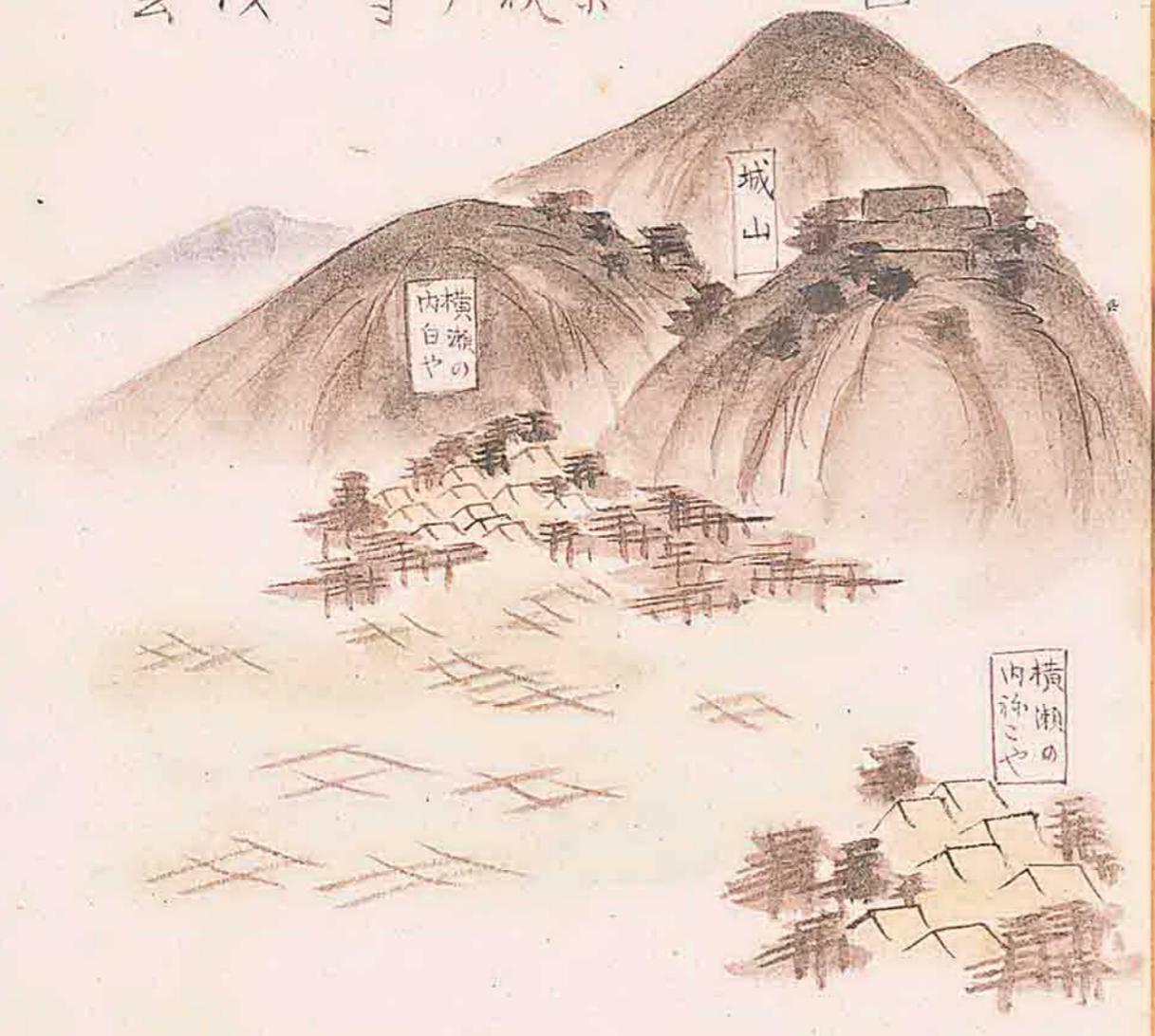
秩父通志曰城山北条
安房守氏邦の城跡也秩
父の押三鉾形の城まより
家臣を交代ニ此城を守
らせし所ト云
武藏鑑ニ元正年中浅
見伊賀守北城住すと云

二子山

城山

横瀬の
白内

横瀬の
内



牛小原手、ぬあこすして、後父那の内巻く結と鐵と
業とす。三角井と本物と、後父結と世々ぬと結
といふは、指右殿と出らる想とあり、又梅の
世ふりより、阿す、梅山の葉の村々、つくまても根右殿
ととる、少るく、板八巻の札不又集む、平比
多御考も小原るのり

杖又後父結と後國傳と云

此年片多を死し、
元中より、あ年うね

一重して死す、
男して名を傳と出

八巻、ま名山、石

南

本手、ハ、十面、観音

七

惠心、傍那の、出、地、を、保、院

二、三、の、し、九、う、ら、た、行、の、指、土、は、り、之、分、ひ、と、母、地、に

お新、三、の、ハ、別、院、は、今、も、う、て、新、夕、ね、し、も、う、
の、今、真、院、と、院、の、判、勢、也、一、時、の、名、ある、と
世、後、礼、師、奇

只、昔、の、め、海、の、時、ハ、初、巻、も

来、う、む、り、あ、ん、こ、を、始、こ、る

初、巻、大、丸、ハ、略、して、あ、る、を、く、色、く、い、あ、ま、と

ス、れ、る、也

是、よう、九、巻、ハ、十、五、町、十、六、万、五、八、巻、の、所、巻、の、古、も、か
裏、道、現、出、る、小、川、紫、鴉、と、架、ま、さ、り、板、屋、あ、り、
山、の、り、う、乃、之、九、巻、集、る、下、院、明、念、と、し、境、内、と、せ、は

御堂も又少く御堂のたりの方よりある。第の御堂
御堂も人取き是と御持をて何して御堂のこ

と云ふ御堂も平地 御堂ハ又御堂御堂
寺のゆかりあり

圓通傳云九条明星山智寺 山堂上りあり
四向面白 本堂

本堂ハ又高橋観音 五條四又
八寸三分 約基菩薩御堂

寺守本堂と建久二年明智御所將來して

此所に寺と建久二年明智御所將來して

御中橋御氏の長加藤何果と云南土世本堂と

信一がの御代持山と云西御堂と云うる

に世甲に疾疫大に就く民家病外志敷也

ら此是御堂と持山へ移せり。一宗ありてとて村長

よりよ御堂御堂に告ぐ何年元の地へ移せり

御堂御堂へ移せり。使東て御堂御堂

告て云四代と良位は南く南那の鬼門固り

家渡神代除く御堂と無御堂と此代に移

ら由り四代ハありく渡神の御堂と云ふ

元此代へ移す。一と一第民惑御堂。今この道場

御堂を此の民の疾疫御堂と云ふ。又明星山と号

す。よりの御堂の御堂御堂の甲に云おと云ふ

目音より兵束いさ。推されハ女と云ふ。せし

すむり世々の林の葉と拾ひ母と書ふ或付るも
のゆく草あ成拾ふ所へ巻傍来て母の眼病と信是
とえつこの文成唱へよと毎推清澤光惠日破能
園の一句とさうく云お悔して母はけ文と教へ母は
よおそのあは通糸よと世文と備次兼明をよとす
円陣より星をそら飛来て母の顔と照すは眼忽
ちよ異あさう甲人いふよと字或歌す成るもその
衆感と信押しく山と明星山と號するといふ

乃礼師弁

めらうまてそら名を問ハ明智守心は日ハ雲を冠

是らう七妻ハ世町神村中成道了河系ハりて板こ
しら目しりて七妻年付ハ美ハ是を午能能
よてさ文庫裏あとも唐一箱より成るをば
庭より遊ぬて傍傍お交り箱こましり

園通傳々七妻書書昔山法本也

徳島ハ伝長
録るしり 柳乃十面觀音 三像受
一尺三寸 幼基菩薩菩薩

他人は二十代朱荳院の系平二の少田那本那
の々花菖山の畑と河桑の倉の惣と云具
長居るの威とらうて強た者云甲人母も
とも名をくしとるハ相馬将門ハ孫

六道成りてめづる心あり

かゝる世成りて牛馬

六波羅に可種通志二可三十四法長とてして廣く及遠
ゆくをこころ角は高人の家あり六波羅に集結して
けふと解るべしけふと推して物頭あるまじき世の事
集結すは思ふハ泊りやも別當は七八町奥に
よとてふありしや

園遊傳に云六波羅白陽山登雲寺佛堂は白陽あり

観音の基菩薩也立像は七昔よりありしや

庵もありしやしうそ地は山深きありしや

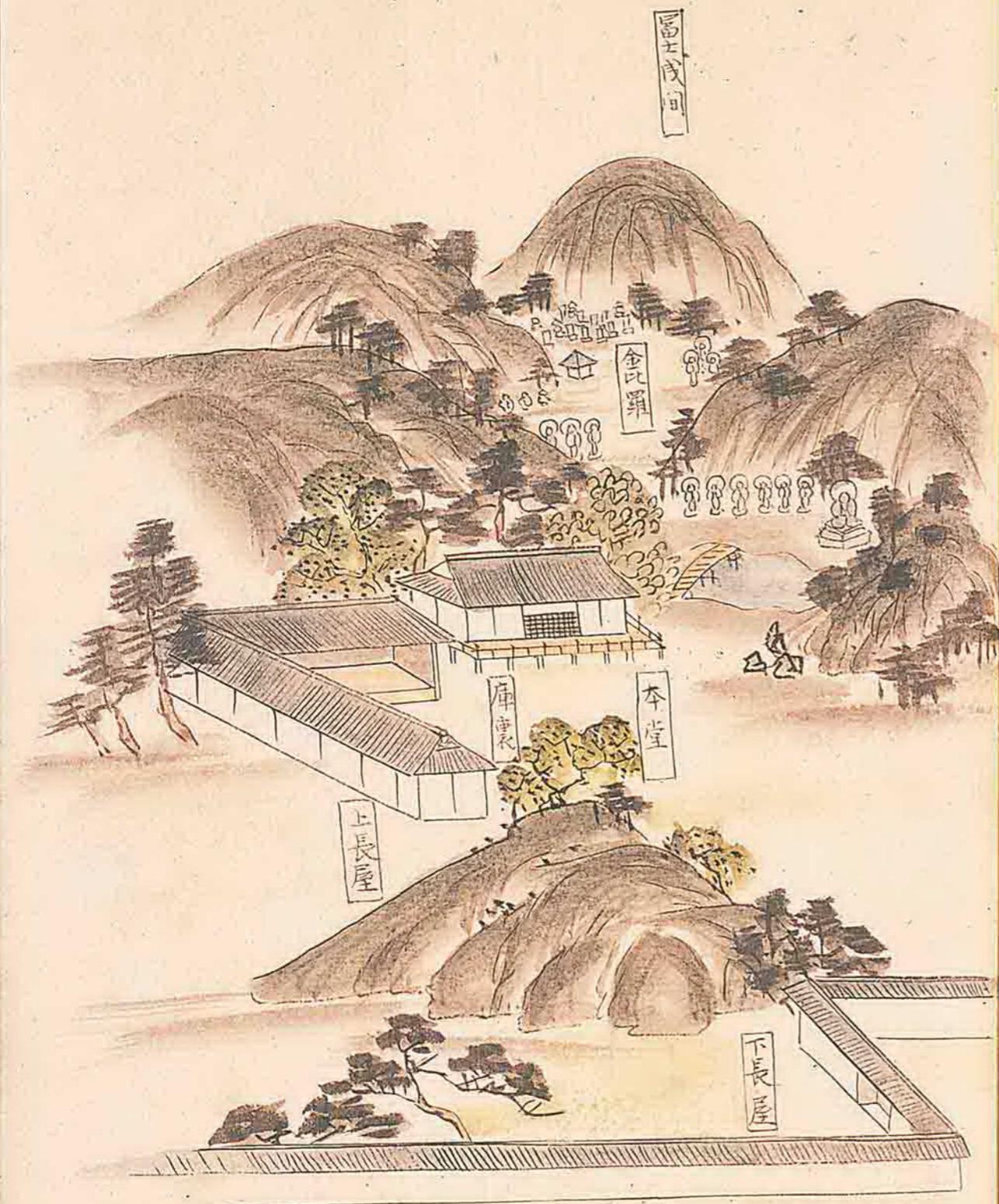
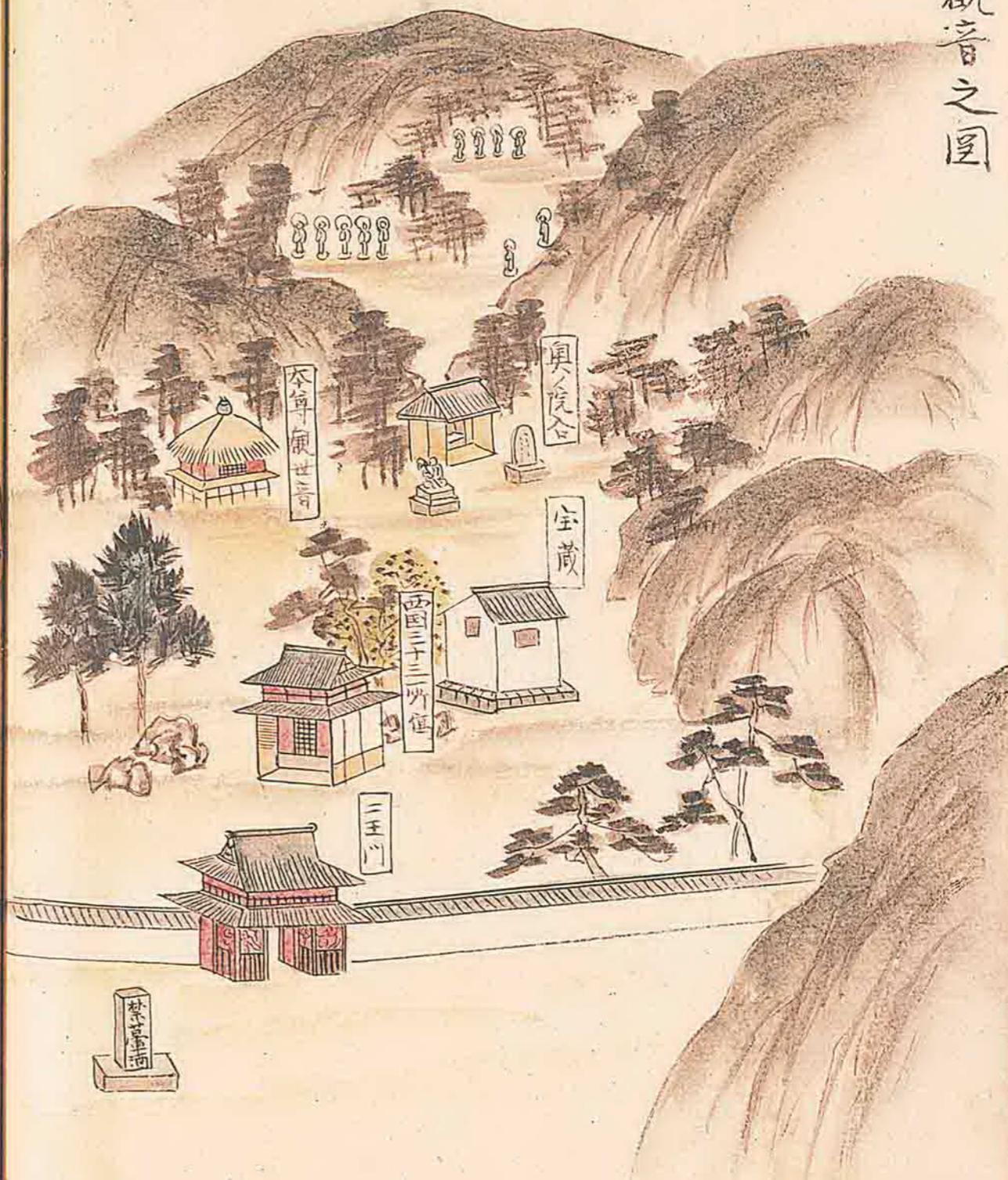
集結の人もまじりてその祿寄世也と傳宣と出
て事六波羅同様のす式とてしうそ地を一首の
お寺と傳す

その始り凡成むまじきの考

右傾の世成りてそのありしや

うへ傳すありしやに遍祿寄は奇も多しこの教の
しるべきは大それた感ありと教のこのありしや
庭前の花のしるはむして色は如奇とてしうそ地
と傳すありしや世成りの下は小寺とて遺る其像と
ありしやしうそ地成りの考

四番觀音之圖



亦よりて業しのみ体じ世ありて呪礼の始祖十之
以新と穿りしそ十三人の能神大権現通観法平花王権
現高魔大王性宣上人徳道上人物之菩薩首光り
也東木之世中の僧位時代前後追言考ふあり

通志云是より(廿四丁二十丁)世守の用祖大徳
禪師の公量り鬼丸と山を楽乃すより名録あり

ちよひと保子とよむる皆門ハ少くともあり

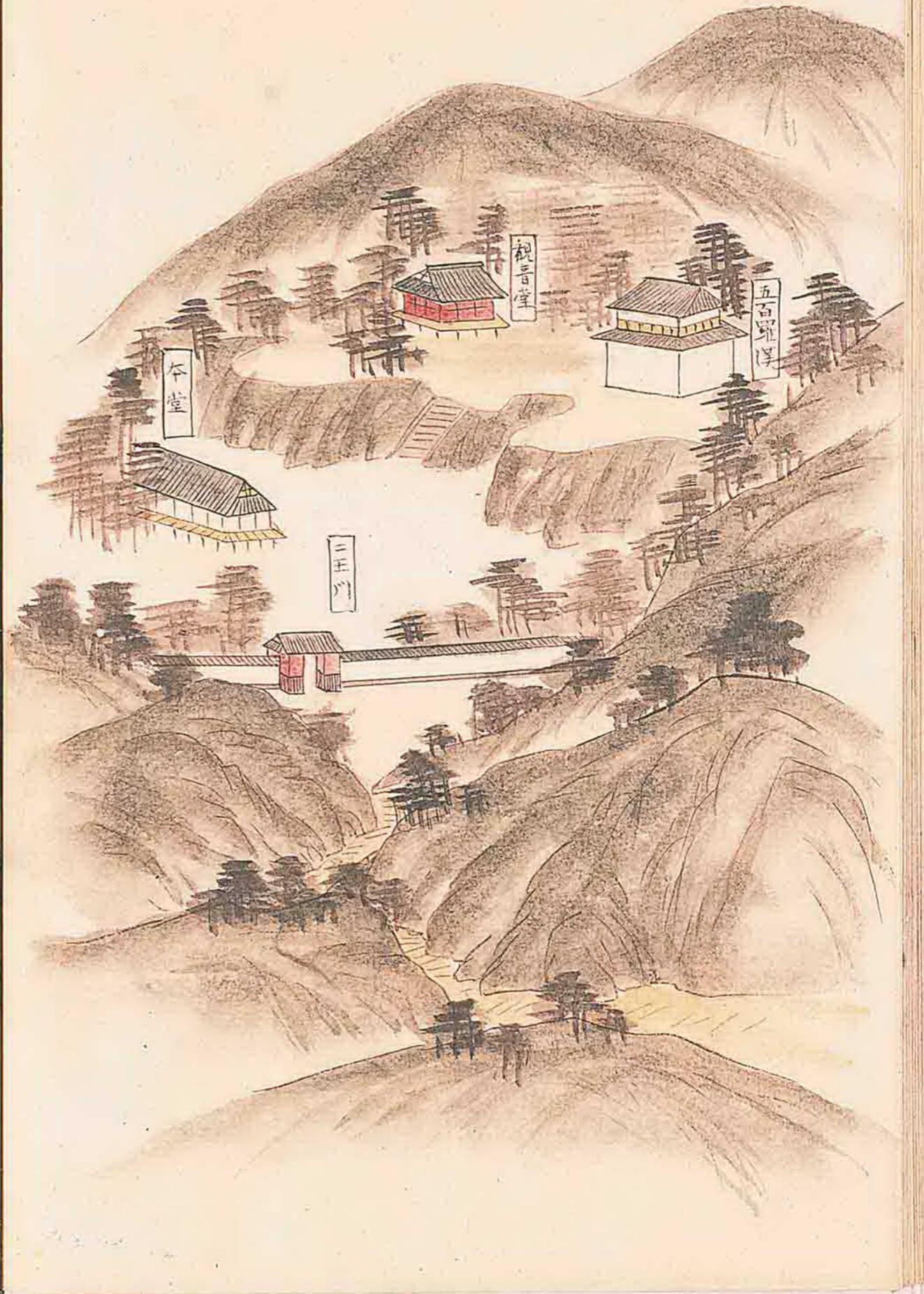
園通傳云分二妻大相山志の福寺 日本又右四回 本寺

聖観音 五條四本 二人の子 乃基菩薩也南ち好司基と

大相禪師とつゝあり通傳へる人も世世の世の若

よつたりたりとぬみ住りて物も業事のほくす甲人
主徳と名く大相の若と列よとる(雨の若大相とよ禪師
鈴子通傳は閑寂とこのもりてりをもき鬼丸とつゝ忌座
に今人間と通傳ふき人のを誤り教束て師の洞中小女
垂りぬる観音と相傳一日師言ていふ世にことりあると
を誤る云ふぬるの鬼に世のうに奉るく住す師の徳
と作す中身に諸縁して鬼意の身と扱せんと欲すると云
師阿られんて破地獄の文并皈戒と扱く鬼女悦んて云
亦ハは昔世甲此農家の妻ありりり 嫉妬ありりり
鬼乃に死し取り今師の教尔佛の悲観り後て世後

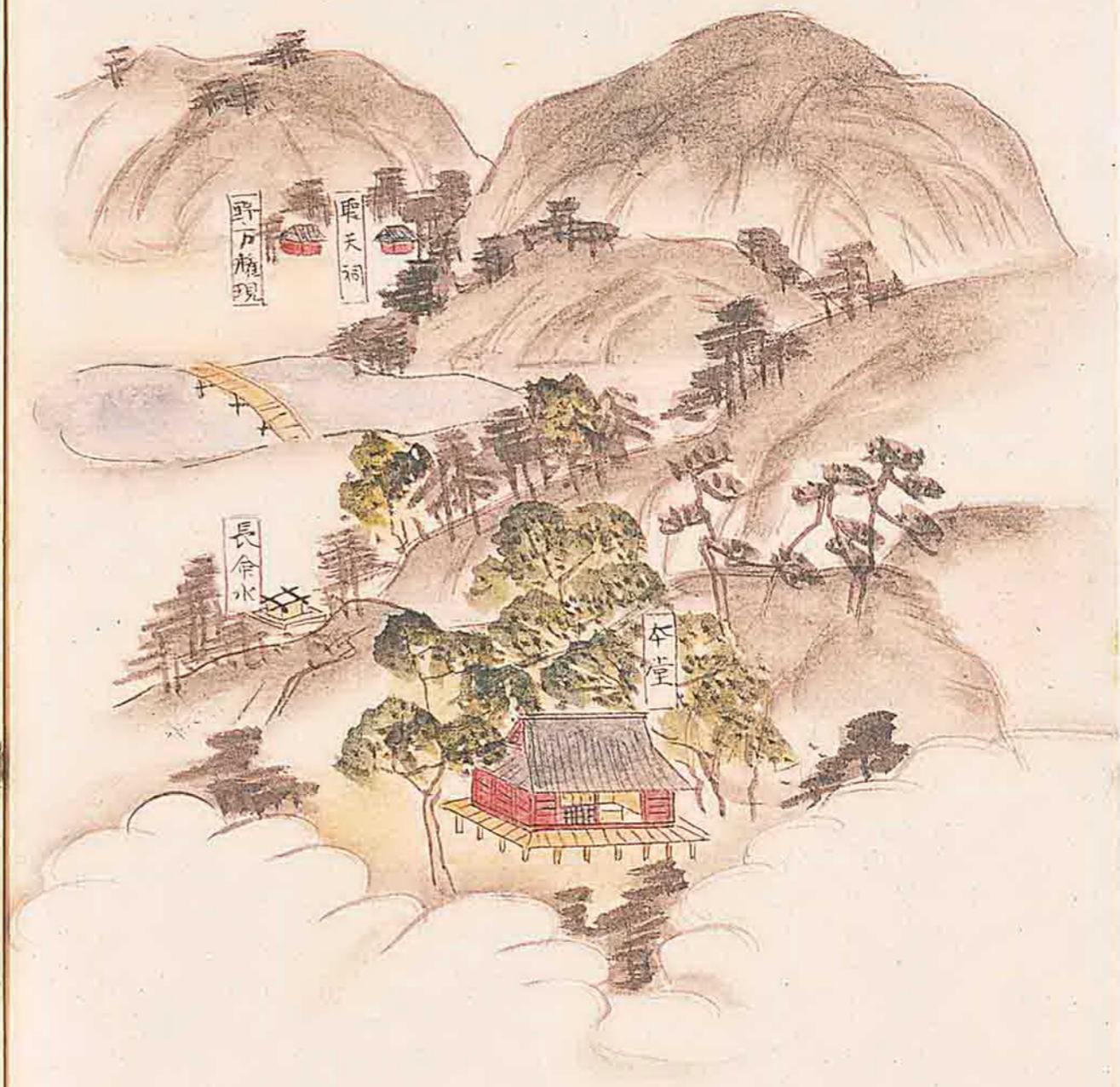
二番大観世音圖



鬼畜の身とく相つゝくろの南無はけ杖とまうへん
人間の相よりす且又師法家かきや法ををき候へ
出へ善く衣食に結縁するさゝのりへとい
ひ終てりき清くくせぬ是よりく一字の
書と建立へ仏を正勝るゝのり今も初は書
とく世地うるす親世喜り縁の正と中その形
割へ一字代草創へゆふを塔二百余のと終今
永延二年性空上人播別書字山とゆふ玉氏
のりへ讀誦之味にへさひりり候てそりひと
息くぬひへ式と書きまのり集てよへん書てん

何とて讀誦息くぬる世おさう東又武義園杖
父那とるりり彼地佛法永へ息るゝへ大徳彼
地佛舎護法のり先のめく妙典と讀誦へぬあを
是親者の四度へと東力とさうて死よりぬ上人え
とり天耳通といぬひへぬ此名の物とありぬひて
別大元と命へて妙理に万劫と讀誦へぬあを塔
寛弘四年三月十ら上人寂く陳へて中子初通宣
に書余へて云汝我滅後東玉杖父より親者の具
物約基地化縁とほとらせへ地と息勝せしむへん
と是さうて初通は丘後又より大息勝去氏と教

三番岩本觀音堂



後義順并記卷之二

年

